

大きな代償
戦争は絶対に
してはいけない

長内三蔵さん（山形町・91歳）

昭和15年1月14日、青森五連隊に入隊した後、中国で鉄道や川、橋などを警備する任務につきました。戦地では終戦まで、中国軍などとの交戦が何度も何度も繰り返されました。

昭和19年7月、新人兵の教育係だったわたしは中国に残りましたが、隊の仲間は沖縄に派兵。結果は全滅です。皆、良い仲間でした。終戦後わたしは捕虜になり昭和21年にやっと帰国しました。

約7年、悲惨な戦争を経験し、人を敬うことの大切を痛感しました。人を粗末にした結果が戦争につながったのだと思います。わたしたちの世代は戦争で仲間や大切な人を失い、大きな代償を払いました。この過ちを繰り返してはいけません。

戦争は絶対にしてはいけないということを、これからの世代の人にも感じてほしいです。

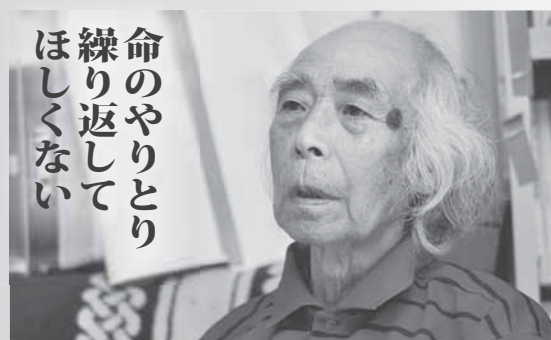
語り継ぐ戦争の記憶

昭和19年3月1日、わたしは横須賀海兵団に入団しました。国の命令は絶対です。当時は異議を申し立てるだけで罪人でした。何が何でも、国には従うしかなかったのです。

わたしは船に乗り、工場を稼働させるための石炭を運ぶ任務につきました。いつ攻撃させるかわからない中、休む間もなく任務にあたりました。

終戦間際の昭和20年7月15日の朝のことです。航行中に突然敵機に襲われ、爆撃を受けました。ミサイルの断片がわたしの頭をかすめ、指と頭の肉をえぐりました。訳が分からないうちに仲間は命を落とし、船は沈没しました。断片があと5cmずれていたら、わたしの命もありませんでした。

戦争は命のやりとりです。絶対にするべきではありません。もう繰り返してほしくありません。



命のやりとり
繰り返して
ほしくない

大湊長太郎さん（夏井町・87歳）

終戦65年目の
戦没者追悼式

戦争を
忘れ
ない



戦没者追悼式の会場前に並べられた戦没者の遺影

深い悲しみ、つらい記憶。終戦から65年たった今も戦争は人を苦しめ続けています。国と国が争い、命を奪い合った戦争。今ある平和な暮らしは、はかり知れないほど大きな悲しみと苦しみの上に成り立ったものです。65年がたち戦争を知る人は少なくなりました。しかし、わたしたちは戦争を忘れてはいけません。もう二度と戦争を繰り返さないために。

献花し冥福祈る

世界で5500万人もの命が犠牲となった第二次世界大戦（太平洋戦争・大東亜戦争）。昭和20年の終戦から今年で65年を迎えました。8月4日、市内催事場で開

かれた久慈市戦没者追悼式（市・市遺族会主催）。例年になく暑い暑さが影をひそめたこの日、喪服を身にまとった戦没者遺族など150人が会場に足を運びました。会場前には、戦地に赴き、命を落とした戦没者の遺影が



献花し、戦没者の冥福を祈る出席者

並び、会場内には大きな献花台。厳かな雰囲気の中、式が進められました。

山内隆文市長は「久慈から遠く異郷の地に赴き、亡くなられた約800人の方々。わたしたちは、この歴史を永遠に忘れてはなりません」と式辞。黙とうの後、市遺族会の生平勝美会長は「わたしたちが謳歌する平和は、尊い犠牲によるもの。このことを忘れずに、国の平和と家族の安泰に向けて努力していきます」と追悼の言葉を述べました。言葉を発さずに、戦没者への思いをかみしめる出席者。戦地で命を落とした家族などの冥福を祈りながら、一人一人、祭壇に献花しました。

繰り返さないため

終戦から65年。戦争によって肉親や友人を失った遺族の方々には、消えることのない深い悲しみがあります。戦地で多くの生と死に直面し、生還した方々には、忘れられることのできないつらい記憶があります。今も、戦争に苦しめ続けられている人がいるのです。反面65年がたち、戦争の悲惨さや実際の苦しみ、悲しみを知らない世代は増えました。国と国、人と人が争い、当たり前のように殺し合わなければならなかった戦争。久慈からも大勢が出征し、800人あまりが命を落としました。今ある平和な暮らしは、戦地などで犠牲になった方々と、その家族の苦しみの上に成り立ったものなのです。

知らない人の命を奪う。親や兄弟、友人は次々と命を落とす。この戦争という事実を忘れることは怖ろしいことです。100年、200年、この先、どんなに歳月がたとえと、わたしたちは戦争を忘れてはいけません。もう二度と過ちを繰り返さないために。



追悼の言葉を述べる生平会長